

文教常任委員会委員会調査報告書

令和7年10月8日（水）に、県立相模原中等教育学校において、次の事件について調査を実施したところ、その概要は別添のとおりでした。

【調査事件】

- ・ 県立学校等に関する事項について

令和8年2月17日

神奈川県議会議長 長 田 進 治 様

文教常任委員会委員長 菅原 あきひと

1 調査の概要

(1) 調査日程

令和7年10月8日（水）

(2) 調査箇所

県立相模原中等教育学校（相模原市南区相模大野4-1-1）

(3) 出席委員（計12名）

菅原あきひと委員長、おざわ良央副委員長、
難波達哉、田村ゆうすけ、楠梨恵子、小島健一、相原しほ、吉川さとし、岸部都、
おだ幸子、片桐紀子、すとう天信の各委員

(4) 随行者

川瀬主事（議会局議事課）、宮下副主幹（教育局総務室）

(5) 行程

県庁～県立相模原中等教育学校～県庁

2 県立相模原中等教育学校

(1) 調査目的

県立相模原中等教育学校は、中高一貫校として平成21年に開校した6年制の中等教育学校である。教育課程を2年ごとに基礎期、充実期、発展期に分け、発達段階に応じた教育を展開するほか、中等教育学校に適用される特例を生かし、高等学校の学習内容を先取りして学習している。

そこで、同校での特色ある教育活動を調査することにより、今後の県立学校に係る委員会審査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

ア 県立相模原中等教育学校出席者

岡野正之相模原中等教育学校長、勝田素貴同副校長、大島みどり同教頭

イ 教育局出席者

篠田寛教育局長、増田年克教育参事監（学校教育担当）、
宮田一男教育局総務室長、市川幸春指導部長、渡貫由季子高校教育課長、
及川博伸高校教育企画担当課長

(3) 委員長挨拶



(4) 教育局長挨拶

(5) 概要説明

次の内容等について、説明があった。

ア 神奈川県立相模原中等教育学校の概要

(ア) 設置形態

(イ) 沿革

(ウ) 生徒数

(エ) 学校運営組織

(オ) 生徒会組織

(カ) 卒業生の進路

イ 学校運営

(ア) グランドデザイン

(イ) 学校教育計画

ウ 各科の内容

エ 生徒会活動・特別活動・学校行事

オ キャリア教育

(6) 校内視察



(7) 質疑応答

質 疑 1、2 学年は32人編成の5クラス編成だが、俗に言う中1ギャップに対しても効果はあるのか。

応 答 中1ギャップはもちろんあると思うが、丁寧に生徒を見るには少人数のほうがよい。生徒も40人よりは32人の方が関係性をつくりやすい。効果としては、1年生の4月にあるオリエンテーション合宿の中でクラス目標を決める際も少人数のほうがよい。また授業についても少人数のほうが教員の目が届く。

質 疑 校長先生が「諦めない教育」とおっしゃっていたが、言葉を聞くと体育会系のイメージが強いが、どのように生徒に教えているのか。

応 答 生徒には集会の際に、あなたの本当に学びたいものは何ですかと聞くようにしている。進路として一定の大学を諦めないということではなく、やりたいことがあるのであれば、同じ学部、分野、自分の学びたいことを追及してほしい。

質 疑 1、2 学年は少人数編成だが、3年生から1クラス40人になることに対して率直な思いは。

応 答 正直に言うと、3年生は人数が少ないほうがいいのかなと。現在国のほうで中学校は35人学級と定めてくるという流れがあるので、恐らくそうになっていくのではと考えている。

難しいのがキャパシティの問題で、各学年5クラスにしてしまうと教室が足りない。そのため、中学段階は細かく分けて、最終的には4クラスに収束していく。高校段階になると、生徒も同じ集団のためクラスが変わっても仲間意識は変わらないので40人でも大丈夫かなと思う。

質 疑 卒業生の子供たちを見ているとすごく個が際立っている。どのような形で関わっているのか。

応 答 先ほどの話にもつながるが、仲間がずっと一緒なので自分を出すことにためらいがない。空気を読んで合わせなくても認めてもらえる。そんな関係性があるのはよいのかなと思っている。

質 疑 普通の高校よりさらに学区が広いのではないかと思うが、災害時の対応や保護者への連絡手段はどうか。

応 答 遠方から通っている生徒は帰れなくなるので学校で面倒をみる。校内で三日間程度は過ごせるように備蓄をしている。後期課程の生徒であれば電車が動けば自分で帰宅ということも考えられるが、前期課程の生徒は保護者に迎えに来てもらう。1学年の頃には実際に保護者に迎えに来てもらう帰宅練習

も行っている。

質 疑 総合型選抜入試についてはどのような準備をしているのか。

応 答 本校は基本的には一般入試を目指しており、総合型選抜入試はオプションとして、うまくはまれば使っているが、総合型選抜入試を利用する生徒は10人程度と少ない。利用する大部分は東京大学や国公立大学の医学部といった難関大学。そういうレベルになると付け焼き刃ではだめなので、日頃の学生生活の中で、たとえば数学オリンピックなどの成果を持っている。その発表のやり方などを教員と練習する。

質 疑 不登校や転学を望む生徒数はどのくらいか。

応 答 3年生までは中学なので退学はない。5、6年生には残念ながら進路変更した生徒さんもいる。

質 疑 中学高校の場合それぞれ入学のタイミングで入学料等の保護者負担が大きいと思うが、一貫校の場合経費の負担はどのようになっているのか。後期課程に上がる際に副教材費等大きくかかるものか。

応 答 中学高校と違いはないと思う。授業の先取りがあるので3年生の時点で高校の教科書を買うことはある。

質 疑 卒業生の進路を見ると理系が多い印象を受けた。カリキュラムは満遍なくやっていて、理系に特化しているようには見えないが、何か取組があるのか。

応 答 学校として理系の大学を薦めているわけではない。あえていうなら数学の授業を少人数展開で学びやすくしていたり、探究に力を入れているので、仮説を立てて実験していく手順が理系と結びつきやすいのかもしれない。

国公立大学を受験する生徒が多いため、共通テストも全科目受ける生徒が多く、ぎりぎりまで文理を意識しないでやりたいことをやっている。

質 疑 一人一台端末について、資料を多く使う授業だと机が狭くなってしまうと思うが、活用状況はどうか。

応 答 使用している授業は多い。発表のプレゼン資料の作成や、数学の授業でのロイロノートの使用、総合的な探究の時間では生成AIをグループ員の一人として、アイデアを出してもらっている。



(8) 副委員長挨拶



(9) 調査結果

- 県立相模原中等教育学校の概要は次のようなものであった。
 - ・ 中高一貫校であり、後期課程は単位制による全日制課程である。
 - ・ 各学年4クラス160人の募集であり、全体で24クラスの学級規模である。
 - ・ 卒業生の進路について、毎年50から60人程度が国公立大学に進学している。
 - ・ 1、2学年は、基礎期として1クラス32人の5クラス編成とすることで、きめ細やかな指導を行っている。
- グランドデザインにおいて、「科学・論理的思考力」「表現コミュニケーション力」「社会生活実践力」という三つの育てたい力を示し、1・2年を基礎期、3・4年を充実期、5・6年を発展期とすることにより、発達段階に合わせて学習、生活、キャリア教育に取り組んでいるとのことであった。
- 「しっかり学び」をテーマに、各科において「読書・暗唱・ドリル・自由発言・自由質疑」「発表・質疑応答・レポート」「探究・ディベート」の三つのメソッド

を柱として授業を展開しており、科学・理論的思考力、表現コミュニケーション力、社会生活実践力を育てているとのことであった。

- 特色のある授業として「かながわ次世代教養」という探究学習に取り組んでおり、その内容は次のようなものであった。
 - ・ 自らの課題を探究によって解決し、他者に適切に伝える能力の向上を図っている。
 - ・ 前期課程では、理科や社会、英語といった各科の授業の中で探究学習やプレゼンテーション能力を高めている。
 - ・ 後期課程では、探究活動を行い、パネルセッションやプレゼンテーションを行う。
- キャリア教育として各学年で次のような体験学習に取り組んでいるとのことであった。
 - ・ 1学年は、オリエンテーション合宿や職業講話を聞く職業研究に取り組む。
 - ・ 2学年は、宿泊研修において農業・職業体験を行う。
 - ・ 3学年は、英語力の実践のため、イングリッシュキャンプに参加する。
 - ・ 4年次は、希望者によるオーストラリアの交流研修旅行を実施している。
 - ・ 5年次は、研修旅行を実施しており、特に今年度においては、生徒自身で研修旅行の内容を計画し、プレゼンテーションを経て投票により方面と内容を決定した。

これら県立相模原中等教育学校における特色ある教育活動に関する取組は、本県の県立学校に係る今後の委員会審査をする上で、参考となった。